

魔将閣下ととらわれの料理番

登場人物 紹介

ルウカ

魔界にさらわれてしまった人間の少女。アークレヴィオンに命を引き換えに服従を誓わされた。くよくよしない性格で、得意の料理を生かして前向きに過ごしている。

アークレヴィオン

魔王の側近。ルウカの始末を命じられたが、自分への服従を条件に、彼女を助けた。クールで基本的に無表情。

レイガ

アークレヴィオンの部下であり、よき理解者。

ヴァルシュ

魔王の側近。非常にフライドが高く、何かとアークレヴィオンに突っかかっている。

ガラード

魔界の王。ルウカを連れ去った首謀者。実は子供っぽい一面も……？

リドー

アークレヴィオンに仕える優秀な従僕。ルウカにも丁寧に接してくれる。



序章

「あれ、さつきもここ通った……」

腕にカゴを提げた赤毛の少女は、ぐるりと周囲を見回した。森に木の実を採りに来たはずが、気がつけば見慣れた風景が一変している。

森は村の近くにあり、少女が普段からよく遊んでいる場所だ。しかし、どこまでも広がる深い森は『魔界』に通じているという伝説があり、大の大人でも決して深入りしないように村で戒められている。少女も気をつけていたはずが、八歳とまだ幼い彼女は夢中で木の実を探しているうちに、森の奥に足を踏み入れてしまったようだ。

人の手がほとんど入っていない原始の森は、道らしい道もない。

鬱蒼と生い茂った雑草は、降りはじめた雨を受けて、ぐんぐん成長していくかに思えた。まるで、少女を森の中に閉じ込めるための檻を作るように。

さまよい歩くうちにしつとりと身体が濡れ、不安に胸が押しつぶされそうになったとき、ガサツと何かが動く音が聞こえてきた。続いて、獣の低い唸り声。

その獣は彼女を標的として捉えたことを知らせるように、短く咆えた。逃げてみるだけでも言わん

ばかりだ。

小さく悲鳴を上げた少女は小走りでその場から離れようとしたが、木陰に黒い陰を見つけて、立ち止まった。

「犬……？」

木々の合間からゆらりと現れたのは、犬というには桁外れの大きさの獣だった。体高は大人の身長をも凌ぐ。

『この森は、魔界に続いている』

それは、不用意に森の奥に入らないようにするための脅し文句だと思っていた。だが、目の前の獣を『野犬』という言葉で片づけるのは無理がある。いくら何でも、こんなに巨大な犬は人間界に存在しないだろう。

(魔界の——犬?)

少女は見たことがなかったが、世の中には『魔獣』と呼ばれる、魔界からやってきた獣が存在するらしい。魔獣は人も家畜も見境なしに襲い、その肉を喰らうのだ。

その淡い灰色の毛並みの獣——魔犬は鼻に皺を寄せ、低く唸りながらゆっくりと少女に近づいて来た。獲物を恐怖ですくませるように身体を低くし、今にも襲いかかってきそうだ。

淡青色の瞳を見開き、目の前に迫る魔犬を声もなく見つめた少女は、ごくんと息を呑んだ。

やがて、太い前脚が雑草を踏みつけ、彼女に向かって飛びかかろうとした——そのときだ。

「なんてきれいなわんちゃん……」

魔犬が襲いかかるよりも早く、少女は駆け寄っていた。そして、自分の頭よりはるかに高い位置にある顔を見上げ、遠慮なくそのふさふさした毛並みに触れる。

「とてもかっこいいのね、わんちゃん。こんなに凛々しい顔をした子を見るのははじめて。それに、毛並みもとってもきれいな。どうなの？ 人間界に迷い込んだのかな？」

森に迷い込んだのは少女のほうなのだが、「いいこ、いいこ」と、牙を剥き出しにしている魔犬を容赦なく撫で回す。

魔犬のほうは意表を突かれたようで、硬直してされるがままになっていたが、少女を喰らう気が失ってしまったのか、くるりと向きを変えて彼女に尻尾を向けた。

「わあ、尻尾ふさふさ！ やわらかーい！」

垂れ下がった長い尻尾に彼女が触れたとき、魔犬はその場から駆け出した。

「あ、待って。おねがい、ひとりにしないで！」

少女は魔犬のあとを追って走り出していた。魔獣は恐ろしい存在だが、理知的な目は少女の言葉を理解しているように見えたのだ。たとえ相手が魔獣であっても、迷いの森の中にひとりきりであるより、話の通じるかもしれない相手というほうが心強かった。

そうして魔犬を追っていると、急に空気が重たくなったように感じた。ほんの一瞬だったが、水の中を歩いているみたいな抵抗感が全身を包む。

そんな違和感に気を取られたとき、突然、足元の地面が消失した。

枝葉に隠れて見えなかったが、少女がいたのは切り立った崖のすぐ側だった。地面が崩れて、少

女の身体は真つ逆さまに落下していく。

「きゃ……!!」

天地が逆になった少女の視界に飛び込んできたのは、どこまでも広がる樹海にそびえる、一本の巨木だった。頂点が雲に隠れるほど高く、まるでこの世界を支配する神のように見えた。(こんな大きな樹があったなんて……)

そう思ったのを最後に、意識はぷつりと途切れた。

あたたかい毛布に包まれて目覚める幸せを感じて寝返りを打ったが、頬に当たった一粒の滴が少女を現実と呼び覚ます。

目を開けたら灰色つぼい毛並みがそこにあった。思わず手で撫でると、とてもふわふわしていてやわらかく、心地いい。まるで、雨に濡れて冷えた身体をあたたためてくれるようだ。

「きもちいい……」

あまりにその感触が手に馴染むので、少女はすりすりとお撫で続けて顔を埋めた。

「グルル」

だが、機嫌の悪そうな獣の唸り声を聞いて、少女は目をまん丸にして飛び起きる。目の前にあったのは、大きな鼻面だった。

「わんちゃん……?」

すぐ傍にいたのは、さっきの魔犬だったのだ。今まで彼女が眠っていたのは、この魔犬の腹の上

だったらしい。

「……助けてくれたの?」

そう問いかけるも魔犬は興味なさそうに丸くなる。おかげでふたたび腹の辺りに巻き込まれたが、その毛並みの感触についつい笑みをこぼしてしまった。

少女は、耳の付け根あたりのやわらかい毛をさすり、その頭を撫でる。だが、魔犬は耳を寝かせたままで、ふさふさの尻尾を「うるさい」とでも言うように振った。

それでも、雨に濡れた少女をあたたためてくれているのだから、やさしい犬なのだろう。

ふと周囲を見回すと、少女と巨大な魔犬は大樹の根元にいた。さっきまでは深い森の中にいたはずなのに、ここはずいぶん開けた場所で、辺りには雨にしっかりと濡れた花々が咲き乱れている。

幹の太さが尋常ではない巨木は、どこまでも天高くそびえたち、終わりが見えない。

「ここ、どこなんだろう……」

いつの間にか、とてつもなく遠い場所に迷い込んでしまった。見たこともない光景に一瞬、鼻の奥がツンと痛んだが、泣き出すより先に、空腹のあまり腹の虫が鳴り出していった。

「そうだ、悲しいとか怖いとか、いやな気持ちになったときはまずお腹いっぱいにして、お母さんがよく言ってくれたんだ」

魔犬に話しかけながら、少女は崖から落ちる時も手放さなかったカゴを開け、中からサンドイッチを取り出した。

「これ、私が作ったの。わんちゃんも食べる? 魔界にもサンドイッチってあるのかなあ」

魔犬は少女の差し出すものを警戒するように見つめていたが、彼女がおいしそうに食べて見せるので、興味を抱いたらしい。鼻をひくひくさせて匂いを嗅ぐと、その大きな口には小さすぎるサンドイッチにぱくつく。

「私ね、お料理が大好きなの。死んだお母さんが料理好きで、いろいろ教えてもらったんだ。いつかお母さんみたいにお店を持つのが夢なの。でも……ここから帰れるかわからないよね……」

少女の独り言は次第に尻すぼみになっていった。魔界に続く森で迷子になったということがどういう意味を持つのか、八歳の少女にもいやというほどわかったからだ。

そうやって落ち込んでいる間にも、魔犬が少女の手元に視線を向けたので、サンドイッチをもうひとつ口元に差し出してやると、今度は味わうように何度も噛みしめる。すると、寝たままだった耳がピンと立って、長い尻尾がゆさゆさと揺れはじめた。

「気に入ってくれた？ お母さんは、誰かが喜んで食べてくれるのがうれしいってよく言ってたけど、喜んでもらえるとはんとにうれしいね！」

少女の言葉を聞いているのかどうか、魔犬は立ち上がるとブルブルと身体を振り、雨の滴を払い落とす。そして少女の足元にうずくまると、「乗れ」と目で指示した。

「乗ってもいいの？」

恐々と背中よじのぼると、魔犬はその大きな身体からは想像もつかないほど身軽に走り出す。どんどん景色が流れていき、少女は振り落とされないうしがみつくのが精一杯だった。

ふと魔犬が立ち止まり、背中から降ろされると、そこには馴染みのある景色が広がっている。少

女の住む村に続く、森の出口付近だったのだ。

「え、送ってくれたの……？」

森の景色から魔犬に視線を戻すと、その姿はもうどこにもない。

結局、お礼も言えずじまいだったが、少女——ルウカにとって、この雨の日の出来事は、決して忘れることのないあたたかな記憶となった。

食事の時間が終わり、侍女たちが調理場へ引き揚げてくる。

「今日は陛下も殿下も、お肉の塩加減をお褒めくださいましたわ」

給仕をしていた侍女がそう報告すると、調理場で働く人々の顔が晴れやかになった。

「そうか！ 今朝はルウカが塩抜きを担当してくれたんだったな。よくやったぞ」

「ありがとうございます、料理長。みな様に喜んでいただけでうれしいです」

だが、今日の成果を噛みしめる暇もなく、調理場はあわただしさを取り戻していく。料理長は残された料理の味を再確認し、ああだこうだと独りごち、次の料理の研究に余念がない。

何しろこの国を治める王家に、料理を振る舞わなければならない——そう、ここはエヴァーロス王国の王宮調理場なのだ。

生真面目な料理長の呟きに耳をそばだてながら、ルウカはせつせと皿洗いに勤しむ。料理人見習いの彼女は、毎日早朝から夜遅くまで忙しいが、料理は好きだし、俸給はいいし、ルウカにとっては願ってもない職場だ。

「さあ、そろそろ休憩にしよう。今日のまかない当番はルウカだったな」
料理長の言葉に、調理場の面々に喜色が広がった。

「ルウカの作るまかない、本当においしくて大好き」

「陛下にお出ししてもいいんじゃないかい？」

同僚たちに称賛され、すでに仕込んであった鍋を火にかけてながらルウカは照れ笑いを浮かべる。

「ありがとうございます。でも、私の料理は田舎料理ばかりですから……とても陛下にだなんて」

「いやいや、故郷の母の味を思い出すよ。この肉団子のシチューは料理長のお墨付きだ」

「そう言っていたら、ほんとにうれいします。このシチューは母の十八番だったんです。あ、それから料理長！ 昨日、市場で珍しい香辛料を見つけたんです。独特でさわやかな香りがとつても良くて。試してみたら、お肉の臭みごとれて、すごくやわらかくなったんですよ。それから……」

ルウカが料理のことを語りはじめると、誰にも止めることはできない。調理場の人々は顔を見合わせると、苦笑いを浮かべた。

「さあさあルウカ、その話はあとでゆっくり聞くから、まずは食事の支度をすませてしまおうじゃないか」

「す、すみません。すぐに用意します！」

一仕事終えたあとの調理場に食欲をそそる香りがただよい、あわただしい空気を日常のゆったりした空間に戻していく。調理場の面々は席に着き、ルウカがつくったシチューをおいしそうにほおばった。

「あ、ほんとだ。お肉がいつもよりやわらかいな」

「ですよね!? 外国の隊商から買ったんですけど、まだまだ知らない食材がたくさんあって、見て

るだけでも楽しくなつちやいます。他にもいろいろ買い込んできたんですよ、お魚のペーストの瓶詰とか、野菜の酢漬けとか！ おいしく食べる方法を研究するので、味見してくださいね」

料理好きだった亡き母の影響もあり、ルウカの料理への情熱は他の追隨を許さない。そして、城の調理場という職場では、たくさんの助言や発想を得ることができると。毎日が楽しくて仕方なかった。

「へえ、これがルウカのお母さんが遺したレシピ集か。ずいぶんと細かく書いてあるなあ」

「いつも持つてるんだ？ まるで聖典だね」

ルウカの宝物でもある母のレシピ集をポケットから取り出すと、料理長がめくり、同僚たちも興味津々でのぞきこんだ。几帳面な字がびつしりと書き込まれており、盛り付けの図解まである。

「この煮込み料理おいしそう！」

「こっちの豚肉のオープン焼きも絶対おいしいうて」

「へえ、ルウカの故郷ではキノコをこんふうに調理するんだ。今度試してみようかな」

そんな平和な日常に、ルウカはしみじみと幸せを噛みしめた。

「ごちそうさま、今日もおいしかったです。そうだルウカ、夕食の仕込み前に食糧庫に行つて、足りない調味料を持つてきてくれるかい？」

「はい！」

補充もルウカにとっては楽しみのひとつだ。食事を終えると、いそいそとカゴを持って裏庭に面した食糧庫へ赴いた。

「ええと、お砂糖が少なかったのよね——コシヨウとお塩、お酢、それから小麦粉……」

王宮の食糧庫らしく、棚にはありとあらゆるスパイスや調味料、貴重な砂糖や保存の利く食材などがぎつしりと備蓄されていて、眺めているだけで心が躍る。故郷の寒村では見たこともなかった高級な食材は、手に取ると今でも緊張するほどだ。

大きなカゴいっぱいそれらを詰め込むと、調理場へ取つて返す。近頃では、メインの料理を任されることもあり、自信がついてきた。ルウカの生活は順風満帆そのものだ。

十年以上前に亡くなったルウカの母は、故郷の村で唯一の食堂を営んでいて、女手一つでルウカを育ててくれた。

父親は、物心がつく前に事故で亡くなったのであまり覚えていないが、母はルウカにたくさんのものを遺してくれた。その最たるものが、今日のルウカの財産である料理だ。

母はもともと身体が弱く、自分亡きあとのルウカの将来を心配していたのだろう。自分が持っているものを少しでも一人娘に遺そうと、家庭料理や店を出していたメニューなど、たくさんのレシピを雑記帳に書き綴っていた。

そんな母もルウカが八歳になったときにととうとう亡くなり、天涯孤独となった彼女は村長に引き取られた。その後、形見となったレシピ集を見ながら懐かしいあの味に近づけようと必死に料理を勉強していたら、いつしかすっかり料理好きになっていたのだ。

こうして成長したルウカが王城の調理場で働くようになったのは、今からちょうど一年前のことだった。

生まれてはじめて村を出て、数日の宿泊予定で王都へ遊びに来たが、そこはルウカが今まで見たこともない食材や調味料、たくさん料理であふれている魅惑の街だったのだ。何日滞在しても飽きるどころか、ここに住みたいとさえ思ったほどだ。

すっかり王都に心酔していたとき、城の調理場で下働きを募集していると聞きつけたルウカは、一も二もなく飛びつき、信じられないことにその場で採用されるという幸運に巡り合った。

育ての親たる村長に事情を伝えると「ルウカの料理が食べられなくなるのは残念だよ」と惜しみなながらも快く送り出してくれた。

それ以来、城の下働きとして皿洗いや野菜の皮むきといった地味な仕事を嬉々としてこなしてきた。そんなルウカの、料理へのただならぬ情熱に感心した料理長が、少しずつ調理に携わらせてくれるようになったのだ。

いつかたくさんの料理を覚えて一人前になったら、どこかの街で料理屋を開くのが彼女の夢だ。そして、それはまだ十八歳のルウカにとっては実現する見込みの高い、現実的な将来設計だった。

——しかし、そんなルウカの行く手に、この日、暗雲が垂れ込めたのである。

カゴを持って食糧庫を出たとき、城のどこから人々の混乱した悲鳴が上がる。驚いてそちらを見つめると、破壊音を轟かせて城の上階部分の壁を突き破り、城内から何かが外へ飛び出してきた。呆然とそれを見つめるルウカの耳に届いたのは、「魔獣が外へ逃げたぞ!」「下に人が!」という衛兵たちの怒声だ。

「え……?」

戸惑うルウカの前に、激しく風を巻き上げながらそれは降り立つ。

顔は人間によく似ていた。だが、眉はなく感情のない目、鼻には深い皺が走り、歪んで横に広がった口からは長く巨大な牙がのぞく。身体を覆う毛は獅子に似て、不安を誘う黒ずんだ赤色だ。身体は四つ足で前脚は太く大きい。その鋭利な爪で引き裂かれたら、人間など一撃で即死してしまうだろう。背中の醜い瘤からは不気味な翼が生えている。それは、ルウカを威嚇するように翼を大きく広げた。

「ひっ」

正視すればするほど奇怪で、醜悪で、おぞましい魔獣だ。尾はまるで巨大な蠍だが、くねくねと蠢くそれは一本ではない。何本も絡み合いながら、ルウカに禍々しい先端を向けてくる。

(殺されるの……?)

逃げ場などなかった。ルウカはカゴを抱きしめたまま、へなへなとその場に崩れ落ちる。

恐怖も、あるラインを越えてしまうと、悲鳴すら出てこなくなるらしい。その上、蛇ににらまれたカエル同様、視線は醜悪な魔獣に固定されてしまい、動かすこともできないのだ。

地の底から湧き上がるような唸り声と共に、爪を出したままの前脚がルウカに近づいてくる。衛兵が魔獣に向けて矢を放ったようだが、たくさんの蠍の尾があっさりとそれを払ってしまい、一本の矢すら魔獣の身体には届かなかった。

魔獣は一度だけ背後を振り返り、攻撃を仕掛けてくる人間たちを一喝するように咆えて彼らの戦

意を一瞬で喪失させると、あらためてルウカに近づく。

まだ小さかった頃、ルウカは故郷の村の森で魔獣と出会ったことがあった。だが、あの灰色の魔獣はこんなにも凶悪な姿かたちはしていなかったし、結局彼女を襲うことなく村へ送り届けてくれたのだ。だが、今ルウカの前に現れた魔獣は、あの遠い記憶の中の魔犬とは似ても似つかない。理知的な様子などなく、本能のままに行動している。

大きく広げられた翼の影が彼女の上に落ち、視界が真っ暗になった。ルウカは呼吸することも忘れて恐ろしい魔獣を見上げ、首を左右に振るばかりだ。

大粒の涙がぼろりとこぼれるが、魔獣に涙など通用するはずもない。

やがて、目の前で大きな口が開かれ、彼女の腕ほどもある太い牙が眼前に迫る。この鋭い牙とノコギリのようなギザギザした歯に噛み砕かれ、無残な屍を晒すことになるのだろうか。

「死にたく、ない……」

だが、ルウカは恐怖のあまりこれ以上直視できず、目を閉じた。

（いったい何のまちがい？ ううん、きつと夢、夢に違いない。そうだよ、そんなことがあるわけない）

冷たい床の上へべたりと座らされ、後ろ手に縛られた自分の境遇を顧みて、ルウカはぶるぶると

頭を振った。

あのあと、魔獣はルウカを引き裂いたり喰い殺したりはしなかったが、代わりに鋭い牙のある口に彼女の胴体を啜え、ここへ連れてきたのである。

その間はずっと、ギザギザした歯にいつ噛み潰されるのかという恐怖に震え上がっていた。そして気づいたときには、こんなことになっていたので。

「魔獣に誘拐されたなんて、いやだ、なんて悪夢。早く朝にならないかな」

さつきから心臓がドキドキしていて、呼吸も乱れて落ち着かない。平常心を保つために明るく言ってみたのだが、自分の上に降りかかる冷たい視線に耐えきれず、とうとう口を噤んでうつむいた。

「顔を上げる、人間」

「は、はいっ」

命令し慣れた威圧的な声に、ルウカは弾かれたように顔を上げた。

薄暗く、天井の高くて広い部屋には、立派な玉座。そこには長い足を組んだ青年が座っていて、ルウカを金色の目で見下ろしている。震えがくるほどの冷たい視線と彼の異様な外見に、寒くもないのに鳥肌が立ち、ルウカは唇を噛みしめた。

この青年、外見は人間そのものだが、明らかに人間ではない。

精悍とさえ言える凛々しい顔立ちと褐色の肌には、白いブラウスがとてもよく似合っていて、こんな状況でなければ見とれていたかもしれない。

だが、長く波打つ黒髪の頭からは、ヒツジのような立派な角が生え、顔の横辺りできると弧を描いているのである。

王冠がわりに角のかぶりものをして……というわけではないだろう。この青年の放つ威圧感と表情から、そんなおちゃめな人物とはとても思えなかった。

(てことは、そう、きつとヒツジの王さま)

恐怖に打ち勝つために、ルウカはあえて牧歌的に考えることにした。

視線をずらすと、玉座の左右に、すらりと背の高い青年たちが控えるように立っている。

左側の青年は角もなく人間と変わらぬ容姿で、短い髪は黄金色だ。しなやかな肢体に濃紺の服をまとう姿は武官を思わせるが、剣は携えていない。狡猾そうな琥珀の瞳が、ルウカを睥睨していた。

(何か、神経質そう……)

そして右側の青年は、室内を照らすランプの炎を受けてきらきらと輝く、長い銀色の髪を持ち主だ。こちらも角はなく、姿はいたって普通の人間である。瞳は金というよりも月の色に近く、獣の瞳を連想させた。

だが、いたって普通というには、眉目はあまりに秀麗で、引き締まった頬は凛々さを際立たせている。無表情のままルウカを見下ろしていて、まったく温度を感じさせない立ち姿にもかかわらず、ルウカの視線は釘づけになってしまった。

(……ちよつと、ステキ)

完全に場違いだが、好みのタイプだったのだ。

そんなルウカの内心を一蹴するよう、玉座の青年が足を組み替えて言った。

「ベレゲボルブルップ」

(え？ 何語？ 言葉通じない!?)

ヒツジの王さまが何を言っているのか聞き取れず、ルウカは見知らぬ土地で言葉もわからぬまま、無残に処刑されてしまうのかと絶望した。何しろ彼女は、完全に囚人の扱いである。

(あれ、でもさつき、言葉通じてたような……?)

そのとき、ルウカの背後で何かが動く気配がした。はつと振り向くと、ルウカをここへさらってきたあの恐ろしい巨大な魔獣が、ヒツジ王のもとへのそのそと歩いて行く。そして信じがたいことに、じゃれつくように彼の手に頭を擦りつけたのだ。

「……これがエヴァーロスの王女なのか？ エヴァーロスの王女は、類稀な美しさを持つ娘だと聞いていたが、こやつは貧相な小娘ではないか。しよせん人間の審美眼などアテになるものではない」
はつきりと言葉は通じた。ルウカについて悪し様に言われたが、事実なので反論の余地はない。
エヴァーロスの王女は本当に美しい方で、自分など比較の対象にもならないことは百も承知だ。ルウカは運よく城の仕事にありつけただけの、寒村出身の一般庶民である。いったいどこでどんな誤解が生じたのやら、ルウカは王女と間違えてさらわれてきたらしい。

「あの、私は……」

「陛下。恐れながら、この人間は王女ではありません」

人違いを訴えて、何とか帰してもらおうと考えたルウカの言葉を遮るように、銀髪の青年が指摘

した。

「王女ではない？」

「この娘の粗末な服装といい、汚れた顔といい、せいぜい城で働いていた下女でしょう」

彼の言うとおりに、ルウカのお仕着せにも前掛けにも、ソースや油の飛び散りで染みができているし、頬には小麦粉がこびりついている。

それを聞いて、金髪の神経質そうな青年が嘲るように笑った。

「さすがアークレヴィオン卿は、人間のことに詳しい」

だが、アークレヴィオンと呼ばれた銀髪の青年は、彼の言葉には完全に無反応だった。無視された態の金髪の青年は、小さく舌打ちをする。どうやらこのふたりは仲が悪いようだ。

一方、陛下と呼ばれたヒツジの王さまは、左右に控える偉丈夫たちの静かなる争いなど意にも介さず、じろりとルウカを一瞥してから、手に噛みついてじゃれつく魔獣に視線を移した。

(手、ちぎれないのかしら……)

ルウカの心配をよそに、王さまの手は無事なようだ。

「ベレゲボルブルップよ、我は人間の『王女』を連れてこいと言ったはずだ」

ヒツジ王の発した謎の言語は、この魔獣の名前だったのだ。人違いを指摘されたベレゲなんたらは、しおらしく耳を下げ、「グルル……」と言い訳するように力なく唸った。

「何？ 城において、手足が二本ずつで目もふたつ、長いスカートを穿いていた？ そうだろう、そうだろうともベレゲボルブルップ。人間の女はたいていそういう姿をしている」

「がう……」

「そして、うまそうな匂いがした？ 食い意地の張ったヤツめ。それに、確か王女は金髪と聞いていたが、この娘は赤毛だ」

それを聞いて、今度は金髪の青年のほうが首を横に振った。

「ガロード陛下。恐れながら、魔獣は色を見分けることができません」

臣下から容赦ない指摘を受けたヒツジ王は不愉快そうに唇を引き結んだ。

「我ら魔族が人間と争いをはじめて幾星霜。彼奴らめ、我ら魔界の者を悪と決めつけ、とくに『冒険者』などと名乗る無法者どもは、魔獣たちをやれ討伐だ、やれ成敗だと容赦なくぶった斬ってくれた。我らの被害は甚大で、これ以上無視することはできません。人間の王女を人質に取り、人間どもに無条件降伏を迫る作戦だったというのに、まさかの人違いとは！」

ルウカは淡青色の瞳をまん丸に見開いて、男たちを見上げた。

エヴァーロス王国をはじめとする、人間たちの暮らす世界を『人間界』と呼び、魔人や魔獣からなる魔族たちの住まう世界を『魔界』と呼んで区別している。

これまでに魔族に惨殺された人間は数知れず、人間たちは己の版図を守るために『魔界』の住人と永遠とも思える戦いを繰り返しているのだ。

そしてこの場にいる彼らは、人間と敵対している『魔界を治める王とその配下』だった。どうやら、人間界と魔界の騒乱に、一庶民たるルウカが不幸にも人違いで巻き込まれてしまったらしい。

今さらながらとんでもない大事件に巻き込まれたのだと痛感し、身体の震えを止めることができ

なかった。

「ヴァルシュ、再度人間界に魔獣を派遣するのだ。今度こそ王女をひっ捕らえて来い！」
ヒツジ王は命令したが、ヴァルシュと呼ばれた金髪の青年は首を横に振った。

「お怒りはごもつともながら、魔界にいちばん近いエヴァーロスでは、城に魔獣が現れたことにより王国の兵士たちはもちろん、冒険者たちや傭兵までかき集め、最大級の警戒網を敷いております。魔獣を一頭や二頭送り込んだところで、討伐されるが関の山」

今度は追い打ちをかけるように、銀髪の青年がたたみかけた。

「今から魔獣を送り込み、王女をさらうのであれば、魔界の全勢力を用いて掃討する覚悟が必要です。そして、それには大がかりな準備が必要かと。とくに魔獣どもは人間と違い、結束することはありません。個々の能力は我らが上でも、全面戦争となれば、魔族も決して有利とは言えません」

仲の悪そうな金髪と銀髪の臣下たちだが、再派遣を反対する意見は一致していた。

魔族は何でも力でねじ伏せるものだと思っていたので、意外に理性的な彼らの会話を聞いていると、話せばわかってくれるかもしれないという、わずかな希望がわいた。

「うぬぬ……仕切り直した。ほとぼりが冷めるまで人間界に手出しはするな」

「あ、あの、人違いだったようですので、私を……」

穩便に事をすませてもらおうべく、ルウカが控えめに申し出ると、ヒツジ王は金色の瞳で彼女を見下ろした。

「アークレヴィオン、この小娘の後始末をしておけ。まったく、とんだ時間の無駄であったわ」

ルウカの最後の望みをぶった切り、ヒツジ王は玉座から立ち上がってマントを翻すと、金髪の青年と、しゅんとうなだれる魔獣を従えて広間から退出してしまった。

アークレヴィオンと呼ばれた銀髪の青年とルウカだけが取り残された広間はシンとして、足元から冷たい空気に包まれていくようだ。

ルウカは怖々と青年を見上げる。彼は相変わらず無表情のままだったが、ルウカとはじめて目を合わせた。

「後始末。ベレゲボルブルップに喰わせてしまえば早かったようだが」

そんな彼の独白を耳にして、ルウカは真つ青になった。ちよつとでも彼を「ステキ」だなんて思った自分はなんて愚かなんだろう。いくら容姿がよくても、彼は人間の敵である魔族だ。この魔人は、ルウカを殺すよう命じられたのだから。

魔人は強い魔力を秘めた者が多いと聞く。この無表情の彼も、その魔力でルウカを一瞬で消すことができるに違いない。

銀髪の魔人が足音を立ててルウカに近づいてくる。そして、彼女の腕を縛っている縄をつかんで強引に立ち上がらせると、粉のついた顔をまじまじとのぞき込んだ。

「おまえは——」

「……！」

あんなに恐ろしい魔獣に連れ去られたときも、気を失わなかった。でも今、静かな恐怖を植えつ

けられ、ルウカの意識はどうとう限界を迎えた。突然、糸が切れたようにルウカの身体から力が抜けて崩れ落ちる。

青年がとっさにその華奢な身体を腕に抱えると、ふわりと彼女の髪から甘い香りがただよびてきた。その匂いを嗅覚がとらえた瞬間、彼は月色の瞳を軽く睜つて、腕の中で目を閉じる顔をじっと見つめた。

ふつと目を開けると、ルウカはベッドに寝かされていた。顔を横に向けると、窓際の小さなテーブルの上に、彼女が抱えていたカゴと、母の形見のレシピ集が置いてあった。

「ここ、は？」

重たい頭を押さえつつ上体を起こすと、ふいにバサバサと羽音がした。

びっくりして振り返ると、上品な調度品の置かれた室内に一羽の鳥がいたのだ。室内飼いのかわい小鳥などではなく、白い斑模様のある大きくて黒い梟だ。

(これも魔物……?)

襲われるのかとルウカは身体を硬直させたが、梟は彼女に見向きもせず、開け放たれた部屋の扉から外へ出て行ってしまった。

ベッドの上から部屋を見回すと、どうやら身分ある人の寝室のようだった。城の調理場よりも広い室内はシンプルだが、テーブルやソファ、絨毯やカーテンに至るまでもとて上等で、落ち着いた雰囲気だ。窓の外は暗いが、中はたくさんのランプに照らされているので、不便は感じない。

自分の身体を見下ろすと、汚れた前掛けは外されていたものの、王宮で支給された調理場のエプロンドレスのままだった。

とはいえ、おそらくここはまだ魔界で、人違いで連れてこられた悲運は続いているのだろう。そう考えると、生きていることに安心してはいけないのではないか。

ルウカがベッドの上で困惑していると、誰かが部屋に入ってきた。

「目を覚ましたか」

ゆつたりとした部屋着をまとった長身の男性が、ベッドの上で固まっているルウカを見て言った。名は忘れてしまったが、たしかルウカを始末するよう命じられていた魔王の側近だ。

「あ、あの、何で私、まだ生きてるんですか……?」

「何？」

「あのヒツジの王さまが、私を始末しろって」

「死にたかったのか」

無感動に言われ、ルウカはキッと顔を上げた。

「違います！ でも、だって、私を殺すつもりなんでしょ」

青年はそれには答えず、満月の色に似た瞳で、じっとルウカを見据えている。そんな無機質な視線に、どうしようもなく不安を煽られた。

あらためてこの銀髪の青年を間近に見ると、彼のまとう冷たい雰囲気や人を威圧するオーラに気が圧されそうだ。

「それなら、どうして気絶している間に殺してくれなかったんですか！ わざわざ意識が戻ってか
ら手を下すなんて、残酷にもほどがあるじゃないですか」

彼の冷たい空気に呑み込まれてしまわないよう、あえてまくしたてて虚勢を張ることにした。こ
うでもしなければ、不安に押し潰されてしまうと思ったのだ。

青年は静かにひとつうなずくと、ベッドの端に腰を下ろした。

「そうだな、どう始末してほしい？」

「ひどい……っ、死にたくないって言ってるのに！ この悪魔、ドS！」

「死にたがっているようにしか聞こえなかったが。まあ、俺のことは何とも言う方がいい——だが、
どえすとは何だ」

どんなに嘸みついても手ごたえがなかったのに、生真面目な顔で問われてルウカはびたりと口を
閉ざした。悪口を言ったと知られたら、余計に残忍な手口でルウカを始末するかもしれない。

ルウカは身を守るように、胸の前でぎゅっつと両手を握りしめる。すると、ふいに青年の長い腕が
伸びてきて、彼女の髪を一房手に取った。

「本気で命が惜しいと思ってるのなら、それを示してみろ」

彼の表情にはまるで感情が浮かんでおらず、何を考えているのかルウカにはさっぱりわからない。
ただ、無条件にルウカを殺そうとしているわけではない気がする。

「どうした。俺に命を乞うのが嫌なのか」

ここで返答を間違えたらどうなるだろうか。さつきから身体が震えたまま止まらない。でも、お

となしく殺されるには、ルウカにはこの世に未練がありすぎた。

「し、死にたくない……私を、人間界に、か、帰——」

やっこの思いでそう口にしたが、喉はカラカラで、かすれ声にしかならなかった。

「聞こえないぞ。さつきまでの威勢はどうした」

ルウカをからかっているのか、少し青年が笑ったように見えた。

その様子は腹立たしかったが、主導権は確実に彼の手にある。何とか願いを聞き届けてもらうべ
く、ルウカは腹をくくった。

「私、まだ死ねないの！ 自分のお店を出すっていう夢があるんだから、こんなところで死んでる
場合じゃないんです！」

「店？」

「私は、死んだ母のように、いつか料理屋を開くって、子供の頃からずっと決めてたんです。私の
料理で誰かに喜んでもらいたいって。だから……」

そう言いながら魔人に詰め寄ったが、不用意に近づきすぎたことに気づき、ルウカはあわてて後
退した。

「だから、元の場所に帰してください。お願いします」

一瞬、彼は考え込むように口を閉ざした。少しはこの訴えが心に響いたのだろうか。

だが、その沈黙はルウカの期待とはまるで逆の方向を示した。

「子供の頃からの夢か。しかし残念だが、人間界に帰すことはできません。ガラード陛下は人間界と魔

界の行き来をすべて把握しておられる。逃げ出したと知られば、魔界の内情を人間界に知らせる危険分子と認定され、ベレゲボルブルップに連れ戻された挙句に処刑されるのがオチだろう」

「そ、んな……」

ルウカは深くうなだれ悲嘆に暮れた。どのみち、彼女には殺される以外の選択肢が残されていないかったのだ。

「だが、命だけは助けてやらなくもない」

「え……?」

「俺に服従するのなら」

ルウカは期待して顔を上げたが、同時に不穏な単語を耳にして、淡青色の瞳を丸くした。

「俺の命に従え、俺の言うことは絶対だ。俺に完全服従しろ。そうすれば、この邸の中では自由を与えてやる」

「魔人に服従するなんて、そんなこと——」

「まだ死ぬわけにはいかないと言ったのはおまえだ。保証はしないが、命さえあれば人間界に戻れる日がくるかもしれないぞ」

ルウカは戸惑い、青年の顔を見つめた。相変わらずの無表情で、何を思っただかそんな提案をしたのか、わからない。

「今すぐ選べ。この場で始末されるか、わずかな希望のために生き延びるか。おまえの自由だ」

三度、ルウカは瞬きしてから、言われた言葉を口の中で反芻した。潔くすべてをあきらめて死

を選ぶか、魔人に服従してでも機会をうかがうのか。

「……ほんとに、従ったら生かしておいてくれるんですか」

「一言はない」

「わかりました、あなたに服従……しま、す。だから、殺さないで」

唇は震えていたが、ルウカの声ははっきりと青年に告げた。選択の余地はなかった。

「よからう。おまえの名は?」

「ルウカ。あなたは——」

「アークレヴィオン」

銀髪の青年は短く名乗ると、ルウカの細い肩をどんと押した。

ベッドの上に仰向けに転がされたルウカは、もがいて起き上がろうとしたが、すぐさまアークレヴィオンに押さえつけられてしまった。

「あの……」

「俺に完全服従するのだろうか? その証を見せろ。抵抗は許さん」

そう言うなり、アークレヴィオンの手がルウカのエプロンドレスの胸元を引き裂いた。布の下からやわらかなふくらみを隠す、白い下着がのぞく。

「——!」

今、魔人に身体を犯されようとしている。だが、生きるために服従すると決めたのはルウカ自身だ。死ぬより悪いことなど、あるはずがない。

「て、抵抗しないから、お願い、乱暴にしない、で……」

覚悟を決めつつも、恐ろしさのあまりぎゅっと固く目を閉じた。

「生娘か。よかろう、最初は手加減してやる」

手加減すると言うわりには、彼の手は容赦なくルウカの服を剥ぎ取っていく。エプロンドレスはベッドの下に投げ捨てられ、頼りない下着だけがルウカの身を守っていたが、それさえも邪魔とばかりにアークレヴィオンが引き裂いた。

「あ」

完全な裸身を晒し、ルウカは寒気に身を震わせた。反射的に腕で胸を隠そうとしたが、アークレヴィオンの力強い手が腕を引き剥がし、頭の上でひとまとめにしてベッドに押しつける。

「や……っ、待って、待って！ こ、心の準備が……」

「そんなもの、いくら待ったところで整うことなどなからう」

低く響くアークレヴィオンの声は、乱れたルウカの心まで縛りつけてしまうようだ。ルウカの抵抗心をねじ伏せると、あらためて彼女の身体を征服しにかかった。

胸のふくらみをいきなりつかまれ、無意識に身体が硬直する。アークレヴィオンはやわやわと揉みほぐすように乳房を手の中に収めてしまう。指先で胸の頂をつままれ、くりくりと刺激されると、呼吸が止まった。

「は、あっ」

他人に触れられたことのない場所を弄られ、言いようもない感覚に襲われて、ため息がこぼれる。

肌がざわつくような、むずかゆいような……

目をきつく瞑ったままのルウカだったが、胸が生温かいものに覆われたのを感じて、思わず目を開けた。

すぐそこに、アークレヴィオンの長い銀髪があった。絹糸のようにさらさらした髪がルウカの素肌の上に流れ、くすぐったくてたまらない。

だが、その髪に向こう側で、アークレヴィオンがルウカの左胸を啜っていた。甘噛みしながら乳首を舌で転がし、突っつき、いやらしく吸い上げる。

右の乳房が手の中でやさしく握られ、頭の中が真っ白になった。

「ん……っ」

喉が鳴ったが、声は出なかった。手首を押さえつけられているので、逃げようもない。

自ら望んだこととはいえ、魔人に胸を——純潔を穢されているなんて。

「どうして、こんな」

「女が男に服従の証立てをするにあたって、これ以上に有効な方法などあるまい」

「やっぱり悪魔！」

生きるために服従を誓ったものの、心は簡単にこの事実を受け入れることはできなかった。殺されたほうがマシだったのではないだろうか、そんな風にも思う。

（でも、死んだら永遠に人間界に帰れない。お店を開くことだって、生きていないとできない）

混乱する頭を整理するために考え込んでいたルウカだが、いきなり身体を貫くような刺激が走り、

悲鳴を上げた。

アークレヴィオンの膝がルウカの膝を割って入り、その秘裂に指を這わせたのだ。隠されていた秘密の場所を暴かれ、その中でひっそりと息づいていた蕾を彼の指がなぞっていく。

「や、ん！ あああ……っ」

乾いた割れ目を彼の指が執拗に、だがやさしく往復していくたびに水があふれ、次第にくちゅくちゅと濡れた音が部屋の中に響きはじめる。聞くに堪えない淫らな音に、ルウカは頭を振った。

「んは……やあっん」

アークレヴィオンの左手で両手をひとまとめに押さえられ、右手では秘所を強引に押し開かれる。下腹部を甘く刺激されるうちに、身体が作り替えられていくような錯覚に陥る。

もどかしさしか感じていなかった胸への愛撫に、ルウカの全身が震えはじめた。熱い舌で尖ったピンク色の乳首を舐られ、やわらかい髪が肌の上を滑っていく感覚に、ルウカはひっきりなしに切ない吐息をついてしまう。

「はあ……ああっ」

やがて、秘裂をなぞる指は二本に増え、ぐちゅっと粘ついた音を立てながら花唇を割って、蕾を目覚めさせるように蠢いた。

「ああっ、ふあ……っ」

さつきまで頭の中で考えをめぐらせていたのに、すでに何も考えられない。腰が勝手に揺れ、必死に閉じようとしていた脚は抵抗の意思を失い、膝を立てたままだんだん開いていくのだ。

「抵抗するなよ」

そう言いおいて、アークレヴィオンはルウカの両手を押さえつけていた左手を離した。代わりに彼女の脇腹や背中、腹部のなめらかな肌をやさしくなぞるように愛撫しはじめた。

「んっ、んっ……！」

無意識に上がる自分の淫らな声に気づき、ルウカは必死に声を殺した。服従を誓ったとはいえ、アークレヴィオンの好き勝手に犯されているのだ。

(気持ちいい、なんて、認めたくない)

しかし、ルウカの腕は彼を押しつけるどころか、ぎこちなくその服の裾を握りしめていた。

「あっ、ああ、だめっ……！」

胸を犯していた舌がルウカの耳元に移動し、喉元や首筋を滑っていく。耳たぶにかすかに歯を立てられると、全身がぶるぶると震え出した。

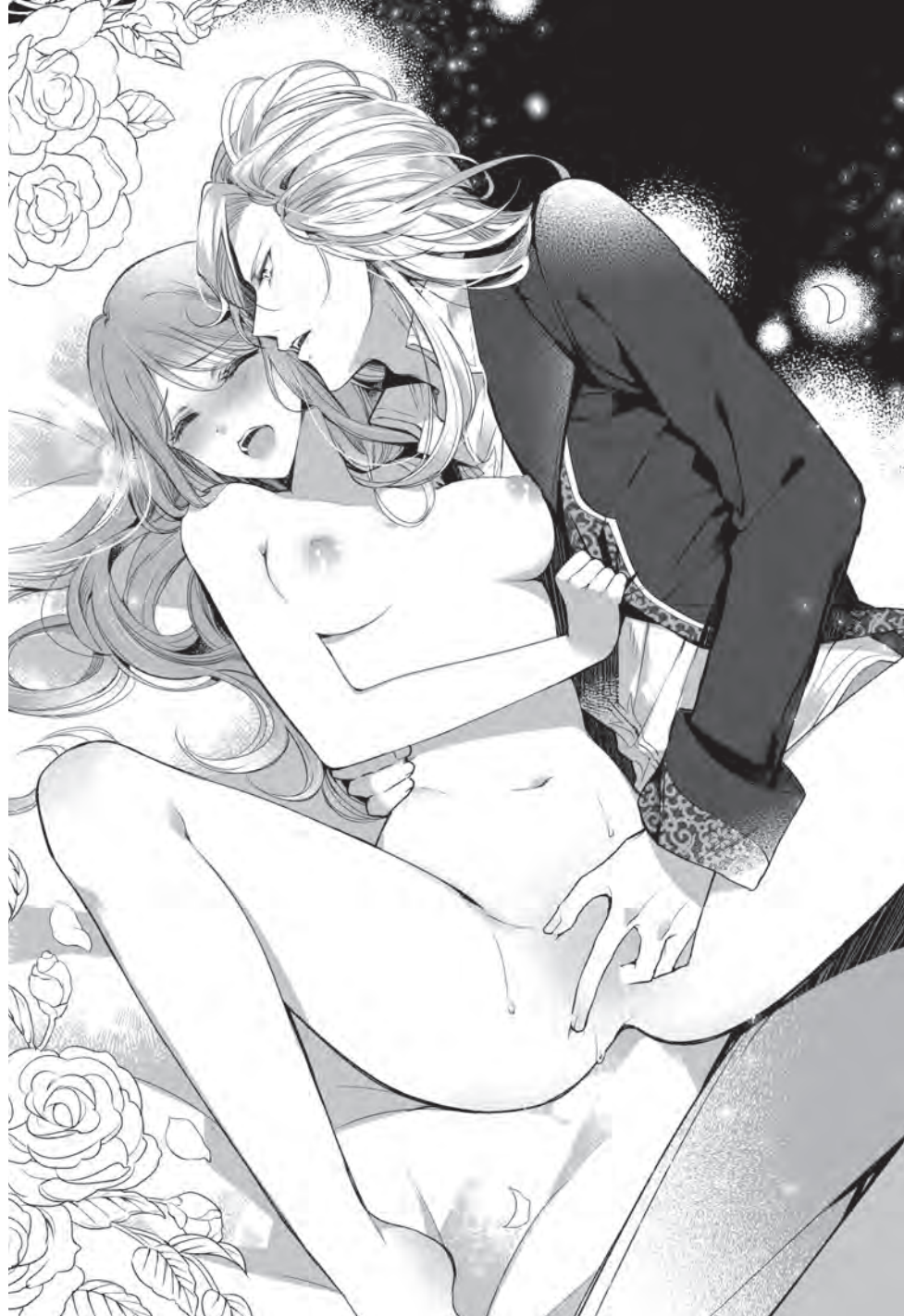
でも、身体が重なるにあたたかくて、心地よさを感じてしまう。

「生娘のわりに、態度は悪くないようだ」

「なっ、ああっ……んああ」

ルウカは頬を真っ赤にして否定しようとしたが、割れ目の中の敏感な場所を擦られてしまい、言葉を失った。そこを指で揺らされると、身体の芯がぎゅっとすばまっていく。

アークレヴィオンはやさしくルウカを愛撫しながら、まるで抱きしめるように腕の中に収め、癖のある長い赤毛に顔を埋めてきた。



強引な言葉とは裏腹にその大きな手は丁寧で、怖いのに怖くない。

彼の為すがままに蹂躪されている事実に変わりはないのだが、先ほどよりも恐怖心が薄らいだような気がする。ルウカは閉ざしていた瞼を、思い切って開けてみた。

（絵画みたいにきれいなひと……）

視界に飛び込んできたアークレヴィオン顔の顔は、憎たらしいけれど、やはりルウカの心の琴線に触れるのだ。うっかり心惹かれそうになったことが癪で、ルウカは険しい表情をつくって彼をにらんだ。

途端にアークレヴィオンと目が合う。彼はルウカの懸命ならみをもとめせず、従順ならざる視線を咎めるように、彼女の喉元に鼻を押しつけ、生温かい舌を肌の上に滑らせた。

「あっ、やっ」

身体の芯がぞくぞくと震えて、肌が粟立つ。とどめとばかりに、ふくらんだ蕾をきゅっつつままれると、全身を貫くような電流が走った。

「んああ……っ」

びくんと身体が跳ねてしまう。ふいにまな板に置かれた鮮魚が思い浮かんだ。さぞ料理のしがいがあると、彼は考えているに違いない。

また抵抗心が湧き上がるものの、アークレヴィオンの指の動きにルウカは素直に反応してしまう。蕾に振動を与えられていくうちに、頭の中の雑念がどんどん薄れて、やがて真っ白になっていき――

「——ああっ」

そこに到達した瞬間、全身に言い知れない快感が流れ込んだ。ふわりと身体が浮かび上がったように感じたあと、一気に脱力すると、ルウカは朱に色づいた唇を薄く開いて乱れた呼吸を繰り返す。

「はっ、はあっ……あっ」

やがてアークレヴィオンの身体が離れていくと、ルウカは力を失ったままベッドに深く沈んだ。魔人に犯されて、気持ちよく感じてしまうなんて。

(何……これ……)

頭の中は真つ白だったが、身体は内側を駆けめぐる快楽の余韻をあさましく味わい、下腹部からは、物欲しそくに淫らな蜜が滲み続けていた。

「はじめてというわりに、身体はよく啼く」

そんな風に評価されればさすがにムツとするが、でもこれで終わりだ。そう安堵の吐息をついたルウカがのろのろとアークレヴィオンに目を向けると、彼はまどついていた部屋着を脱ぎ捨てていた。ゆつたりした服の下から現れた、たくましい裸身を見た瞬間、ルウカは自分が早とちりしていたことを悟った。

「まさか、これで終わりとは思っていないだろうな」

「え——」

アークレヴィオンの身体は、しなやかな細身にしっかりと筋肉のついた、まるで美しく削られ

た彫刻のような肉体だった。見たくもないのに、視線が勝手に吸い寄せられてしまう。

だが、下半身に堂々と隆起する男の象徴を見つけた瞬間、ルウカは悲鳴を上げて飛び起きた。

「逃げるな」

「やっ、だって、そんなモノ……」

アークレヴィオンに背中を向けて逃げ出そうとしたが、あっさり肩をつかまれてベッドの中央に連れ戻されてしまった。

彼はじたばたと暴れるルウカをうつぶせにベッドに押しつけ、その背中に覆いかぶさってくる。

「そんなモノとはどういう意味だ」

「そのままの意味です……っ」

物心ついた頃には、とうに父親と死に別れていたルウカである。これまでに恋人などいたためしもなく、今の今まで、本当に男の裸を見たことがなかったのだ。

「恥ずかしいんです！ 恥ずかしくて死にそうです！」

「恥ずかしくて死んだ者などおらん」

ルウカの背中にのしかかったアークレヴィオンは、彼女のぶるんとした尻を触り、脚を割り開くと、充血した蕾を後ろから刺激しはじめた。

「ひあああっ」

絶頂に達したばかりでひくひくと震えている秘部を執拗に撫でられ、ルウカはこらえきれず顔をベッドに埋めて啼いた。

肩や背中に舌を這わされ、ときどき肌を吸われ、後ろから耳たぶを甘噛みされる。

「ふ、あ……」

裸の男に背後から抱かれて淫らな愛撫をされていると思うと、背徳的な行為に後ろめたさを覚えた。

(でも、気持ちよくて……っ)

アークレヴィオンはシートに押しつけられて潰れた乳房を握る。たわわなふくらみを手の中で味わいながら、ルウカから甘い悲鳴を引き出そうとしているようだ。

「んっ……ああっ……」

こんなこと、今まで誰にもされたことはない。このまま何をされてしまうのかわからなくて怖いのに、割れ目の奥を指で刺激されるたび、身体の中を駆け抜ける快感に身体がほどかれていくようだ。

自分が悪いほう、悪いほうへと墮とされている気がして、やましい気持ちばかりが募っていくのに、身体は言葉通りアークレヴィオンに服従してしまう。

いつしか、内腿は濡れ光るほどに愛液にまみれていた。

「あ……んっ、ああっ！」

「従順になつてきたな、いい子だ」

静かな声が耳元で囁くと、それだけで蜜がとろりと流れ出した。

こんなの嫌がらせに決まっている。でも、ルウカの唇から反抗する台詞は出てこなかった。彼の

言う通り、快楽に従順になった女の吐息が漏れるばかりだ。

「ああ……もう……」

ルウカが肩越しに振り返ると、アークレヴィオンは彼女の顔にかかった赤毛をそつとかきあげ、耳にかけた。その何気ない仕草に、なぜか下腹部の奥がきゅつと疼き出す。

相変わらず表情らしい表情はないのに、間近で見ると彼の顔があまりにも美しく、同時に男らしさも備えていて、こんな最中だというのに目が追ってしまった。

「もつと気持ちよくしてやるうか」

「えっ……」

一瞬、アークレヴィオンの言葉に期待を抱いてしまったルウカは、すぐにそれを否定するようにぶんぶん頭を左右に振った。

(期待なんてしてない！ 私、今この男に犯されているの！ ひどいことされてるんだから……っ)

必死にアークレヴィオンをにらみつけようとするのだが、彼に尻を持ち上げられると、まるで期待するかのようルウカの心臓は大きく音を立てていた。

彼は割れ目に沿って指を滑らせ、濡れた蕾を転がす。

「待つて——あ、あつ、んん！」

アークレヴィオンは、何かを探すように秘裂を指で押し広げると、ある一点をなぞり、ぷつりと膣の中に指を挿し込んだ。

「……っ！」

ベッドに肘をつき、ルウカは耐えるように拳を握りしめ唇を噛んだ。

きつい狭隘をほぐすよう、アーケレヴィオンはゆっくりゆっくりと奥を目指していく。そうしながらもう一方の手は、秘裂の奥のいちばん感じやすい蕾を揺らし続けた。

「て、手加減するって、やああんっ」

「これ以上なくらいに手加減している」

ちっとも手加減されている気はしない。ただ、痛みはいっさい感じなかった。それに、彼女の肌に触れるアーケレヴィオンの手つきは、やさしい。

(やさしい……わけない)

ルウカは誤った認識を追い出すように強く頭を振った。どんなに美しかろうが凛々しかろうが、女を力で征服する男にやさしさなどあるはずがない。

だが、こんな危機的な状況にもかかわらず、彼の指に内壁を擦られながら抜き挿しされると、ルウカは腰を振ってそれに応えてしまう。

「んっ……」

せめてもの抵抗をと、歯を食いしばって淫らな声を抑えていたのだが、肩口をかふりと甘く噛まれた瞬間、隙ができてしまった。

遠慮しながら奥を目指していた指がちまちちと入り込んできたのだ。そしてルウカの中を小刻みに揺らしながら擦っていく。

「ああああっ……！ や、だ、へんな、感じが……っ」

身体の内側を探られる異常な感覚に、神経が研ぎ澄まされていくようだ。

「んああっ、だめ、だめ……」

弄り回される秘裂とその奥が熱を上げ、ぐちゅぐちゅと水音を奏でる。

ありえない場所に触られる違和感とかすかな快感、秘所を犯されている羞恥が混ざって、気持ちの整理がつかない。

それなのに、アーケレヴィオンの手が動くたびに快樂の虜になってしまいそうだ。

ベッドについた膝が震えた。尻を突き出すような格好で犯され、花唇から蜜が滴り落ちる。

混乱しているうちに頭と心がいっぱいになりすぎて、ルウカは息も切れ切れにすすり泣いていた。

「ああ……んっ、やあ……」

ふと、アーケレヴィオンの手がルウカの肩に置かれた。はしたない蜜に濡れた彼の指を見て、ルウカの涙腺はさらに緩んでしまう。

(恥ずかしくて死ねる……！)

だが、彼はそんなことにはお構いなしに、ルウカの身体をころんと仰向けに転がした。

真上から顔をのぞきこまれ、ルウカはあわてて涙の滲んだ目を隠そうとするが、腕を取られ、濡れた目をペろりと舐められてしまった。

「……！」

アーケレヴィオンを見上げると、彼は無表情のまま、まるでなだめるようにルウカの髪をくしゃっと撫でる。

「え……」

ルウカは思わず目を睜ひらって彼を見つめた。この魔人にも、少しくらいは人の情じょうとか、良心のようなものがあるのだろうか。

しかし……

「泣くな。いくら泣こうが喚わめこうが、これはおまえが選んだ結果だ」

やはり魔族は魔族なのだ。ルウカは淡青色の瞳に力を込めて、アークレヴィオンをにらんだ。

「……しっ、仕方ないじゃない！ こんなことされるなんて、思わなかったんだから……っ」

「反抗的だな。俺に服従すると言った舌の根も乾かぬうちに」

冷やかな月色の瞳でルウカの視線を受け止めると、彼は腕を伸ばしてきた。

(殴られる……！)

ルウカは反射的に腕を上げて顔をかばったが、彼の拳こぶしが飛んでくることはなかった。ただ、両腕をつかまれ、そのままベッドに押しつけられてしまう。

「あきらめて俺を受け入れろ。おまえのような無力な小娘ひとりが魔界で生きていくのは不可能。生きたいのであれば、つまらぬ見栄みえなど捨ててしまおうのだな。おまえがここで快楽おぼろに溺れようと、それを咎とがめる者はいない」

突き放されているのか、慰められているのか、どちらなのだろう。

アークレヴィオンはルウカの気が逸れているうちに、無防備にはだけられた胸を口に含み、硬くなった粒を舌で巻き取って、淫みだらな愛撫あいぶを加えはじめた。

「ああ……っ」

執拗しつようにそこを舐なられるうちに、秘裂ひれつの奥がふたび熱く濡れていく。蜜みつがとろりと流れ落ちる感覚に、どうしようもなく身体が疼うずいてしまう。

アークレヴィオンはルウカの腕を解放したが、代わりにズキズキする割れ目の中をやさしく指で往復していった。

後ろから触ふられたときよりも鮮明な快感に満たされていく。

「やあああつ、そんなふうにつ、さわらな……い、で」

身体を反そらして切ない悲鳴ひめいを上げるルウカの喉のどを唇で食はみ、全身をどろかすような甘い手つきで、アークレヴィオンは彼女の身体を愛撫あいぶし続けた。

「はあ……はあ……っ」

いつの間にか身体からは力が抜けていって、彼の与える快感だけに反応するようになっていた。厚い胸に抱だき寄せられると、無意識にその身体にしがみつき、ルウカは震えてしまう。

「もうじゅうぶん濡れたな？」

「ん……っ」

呼吸が乱れすぎて、頭がしびれたようにぼうっとする。もう、何をされても抵抗する気力は残っていない。

それを見越したようにアークレヴィオンはルウカの細い足首をつかみ、膝ひざを折り曲げ、秘所を大きく開かせた。

しとどにあふれた花蜜が、内腿もシーツもぐっしよりと濡らしている。

「ふあ……」

もう心も身体も、この状況についてこれなかった。唇から弱々しい声が漏れたが、そこに力はない。

やがて、その痛みは突然やってきた。熱の塊がルウカの秘所にめりこみ、突き立てられ、まじろみにたゆたっていた意識が、いきなり現実に取り戻されたのだ。

「いやああつ、いたつ、やめてっ!」

だが懇願は聞き入れられず、中をかきわけるようにして熱塊が身体を抉っていく。

激しい痛みでルウカは首を振りながら声を上げたが、アークレヴィオンは自身の身体で彼女の身体を押さえ込む。そして大きく深呼吸をすると、一気にそこを突き破った。

「……っ!」

大きく開かれたルウカの瞳が翳り、涙がこぼれ出す。アークレヴィオンは彼女の顔の横に腕をつき、大粒の涙を舐め取ると、きつく締めつける中を何度もたどった。

「ふ、うっう」

「力を抜け。そんなに力を入れていては、よけいに痛みが増す」

最初は引き裂かれる痛みで悲鳴を上げていた喉も、アークレヴィオンになだめられ、何度も腰を打ち付けられていくうちに、甘い嬌声を勝手に漏らしてしまう。

「あ、んっ……」

ルウカは彼のたくましい背中に爪を立て、内側から迫ってくる波に必死に抗う。だが、体温が重なり合って蠢く感覚に、彼女の腰は痙攣したように小さく震えはじめた。

次第にアークレヴィオンの熱い身体が速度を増し、彼女の狭隘を何度も擦り、奥のほうを突き上げる。

「ああ……もお……」

平衡感覚が失われて、頭から真つ逆さまに落下していくようだ。

「くっ……」

一瞬、アークレヴィオンの身体が強張った気がする。

彼の身体の下でそれを感じたルウカは、必死にもがきながら広い背中にしがみついた。

「ああ……あ、あ……!!」

アークレヴィオンの突き立てた楔を体内深くに啜え込み、熱い飛沫が放たれるのをかすかに感じた瞬間——身体の痛みも、彼の身体の熱も、すべての感覚が消失する。

やがて、引き潮のあとに怒濤のような快樂の波が襲い来て、ルウカは絶頂に呑み込まれた。

次に目を覚ましたとき、そこにはもうアークレヴィオンの姿はなかった。

ルウカはいえ、身体には毛布がかけられており、寝心地のいいベッドの中にいる。

それにしても、身体が重い。身動きしようと思っても力が入らなかったで、ルウカはあきらめて目を閉じた。しかし……

「ぐうううう」

文字にできるほどはつきりと腹の虫が鳴り、ルウカは赤面した。

香ばしい匂いがどこからともなくただよってきており、空腹が刺激されて止まない。

人違いで魔界にさらわれて、魔人に服従を強いられたあげく、純潔を穢されてしまったのだ。普通ならもつと取り乱して泣き叫んでもおかしくない状況なのに、空腹をそえられるような匂いにつられてしまう自分が恨めしい。

(何だろう、お肉が焼けるみたいな匂い……)

ルウカが自分の凶太さに感心しながら辺りを見回すと、タイミング悪く、部屋に入ってきたアークレヴィオンと目が合ってしまった。

「よく寝ていたな」

「それ、嫌味ですか？」

「事実をそのまま言っただけだ。おまえはずいふんとひねくれた娘だな」

表情らしい表情を見せない彼だったが、さすがに呆れたらしく、不器用に表情筋を動かした。

「目が覚めたのなら、下りてくるといい。食事の準備ができている」

「そ、その前に、身体がとっても不快なので水浴びなどさせていただけると、うれしいんですけど……」

「湯浴みでも何でもすればいい。だが、食事が冷めるぞ。腹が減っているのではないのか？」

どうやら腹の虫の大合唱を聞かれてしまったらしい。湯浴みもしたかったが、空腹に抗うことはできない。

「……い、いただきます」

「着替えはそこに用意してある。支度ができたら下へ来い」

そう言ってアークレヴィオンは踵を返すと、さっさと部屋を出て行った。

彼はルウカの命を盾に取って、欲望のままに彼女の身を穢した男だ。ゆえにもつと恐ろしげな魔人だと思っていたのに、食事に誘いにくくれたのだから、拍子抜けしてしまう。

ぼうっとする頭を振ってベッドから下りようとしたとき、ベッドサイドのテーブルに服がたたまれているのを見つけた。

「これを着ろってこと？」

広げてみると、黒いブラウスと、落ち着いた深い赤色のワンピースだった。ご丁寧^{ていねい}に下着なども新調されている。敵の施し^{ほし}を受けるのは気が進まないが、いつまでも裸でいるわけにもいかないの^で、ルウカは妥協^{たきよう}することにした。

「わ、意外と……」

袖を通した赤いワンピースは、ルウカの細身の身体にぴったりで、シンプルながらも大人びた雰囲気だ。スカートはひざ下までの長さで、揺れるたびに内側のレースがひらひらする。

揃えて置いてあった長い革のブーツに脚を通して鏡の前に立つと、憂鬱^{ゆううつ}だった気持ちも少しだけ

軽くなった。ルウカは背中まである髪を手櫛で整える。

「なんだかアークレヴィオンの術中にはまっているようでおもしろくない。

あの魔人に隙を見せてはいけない。こうして身支度を整えたことで、彼と対峙する覚悟も準備も整った。

ルウカは寝室から忍び出る。

(それに、お肉の匂いには逆らえないし……)

料理をするのももちろん大好きだが、食べることでだって同じくらい好きなルウカだ。

寝室を出ると、そこは書斎のようで、壁一面がガラス張りの窓に立派な机、必要最低限の調度品がある。アークレヴィオンの部屋なのだろう。

この書斎といい、寝室といい、彼は華美を好まない男らしい。それとも、魔界ではこれが普通なのだろうか。

窓の外は暗いような明るいような、今が何時なのかもはっきりしない空模様だ。

重厚な扉を開くと、長い廊下が続いていて、奥には下へ降りる階段が見えた。そして、香りはそこからただよってくる。

「やっぱりお肉かな。何の肉だろう、けっこう淡泊な感じがするな」

匂いにつられて階下へ降りると、広々とした玄関ホールに出た。天井は吹き抜けで、銅像や絵画などが品よく並んでいる。

「こうしてみると、人間界とそう大きく変わるわけじゃないみたいだけど……」

ずっと不安の中に取り残されていたルウカも、少しだけ安堵した。

広い食卓の正面にはアークレヴィオンが座して、ワイングラスを傾けている。その姿がいちいち絵になるので、ルウカは視線が釘づけにならないよう、目を逸らすのに必死だ。

そして、この邸でアークレヴィオンの世話をしている、リドーと名乗った黒髪の青年がいそいそと給仕をしてくれている。

最初に運ばれてきたのはサラダだった。青々とした葉に、プチトマトが乗せられた——ように見える何かだ。

ルウカはそれを見て身体を硬直させ、信じられない思いで目をまん丸にした。

(前言撤回！ 人間界と変わらないどころか、何なの、これ……！)

多肉植物なのだろうか、肉厚な葉はギザギザと棘のように尖っていて、かなり視覚に訴えてくるものがあった。添えられている赤い実はトマトかと思いきや、ぬめつとしていて、ルウカの錯覚でなければときどき蠢いているようにも見える。

「あ、あの、この葉っぱと、赤い実は何ですか？」

見た目がかなりおどろおどろしいサラダを指してルウカは尋ねた。

「はい、ルウカさま。これはゲバギルドスという植物です。葉の部分は肉厚で少し苦味があります。赤い実は潰して一緒にいただくと、酸味があっっておいしいと魔界では人気なのです」

リドーは丁寧に解説してくれたが、あまりおいしそうには見えない。

「げば……。何だか、動いているみたいですけど」

「それは肉食ですから」

「にく、しょく……?」

「はい。新鮮ですが、きちんと処理してあるので襲いかかってくることはありません。ご安心ください」

「襲ってくるの!？」

「目は摘んでありますから、大丈夫ですよ」

「芽を摘んでるんですか」

「ええ、目は摘んでます」

何となくリドーと会話が噛み合っていないように感じたが、深く追及するのは怖いので止めておいた。

次いでやってきたのは、スープだった。茶色のような、紫色のような、斑模様があやしすぎる毒沼色のスープだ。具は、得体の知れない白い輪っか状の何かが浮かんでいる。それ以上のことはルウカにはわからない。ただ、彼女の本能が警鐘を鳴らしているのはわかった。

「これは、何のスープですか？」

「はい、ギュレポアをすり潰したスープです。人間界ではジャガイモという穀物が似ているようですよ。それと、このリングはクラーイックという水棲生物の足についていた吸盤です」

「へ、へえ……」

ジャガイモのスープなら口にできそうだが、何しろ色が不気味すぎて食欲がわかない。そして、

魔界の水棲生物とは、つまり魔物ということ……胃の辺りがキュッと縮まった。

続いて、リドーが大きな皿を食卓に置いた。ルウカは悲鳴を上げるのを辛うじて堪えたが、思わずのけぞり、椅子ごと後ろに倒れるところだった。

「大丈夫ですか？」

「は、はい……」

とつさにリドーが支えてくれたので危ういところで難を逃れたものの、目の前の皿を見つめて言葉に詰まった。

ルウカの背丈と同じくらいの体長の、ワニのような爬虫類らしきものがまるっと、こんがり焼き色をつけて乗せられていたのだ。

大きく開いた口の中には、返しのついた針状の歯がびっしり並んでいた。背中はトゲトゲした背びれのようなものが生え、苔色の鱗に描かれた、繰り返される幾何学模様は見ただけで怖気が走る。

ごくりとつばを呑み込んだが、決して食欲をそそられたせいではない。

「こ、これは……」

「はい、今朝、マスターが森で狩ってきてくださった、コドモドラゴンの姿焼きです。幼体なのでやわらかいですよ」

「……」

これがルウカのつられた、肉の匂いの正体であった。